

自然言語の形式意味論と心理学

オーガナイザー

藤川直也 (Naoya Fujikawa) 東京大学

提題者

和泉悠 (Yu Izumi) 南山大学

橋本龍一郎 (Ryuichiro Hashimoto) 東京都立大学

藤川直也 (Naoya Fujikawa) 東京大学

自然言語と論理はどう関係するのか。この問いをめぐる研究に大きな転換をもたらしたのは、モンタギューによる自然言語の形式意味論の試みである。モンタギューは、自然言語が次の意味で論理的な言語であること、すなわち、論理学において形式言語に与えられるのと同様のモデル論的意味論を自然言語に与えることができるということを、実際にそのための合成的な手続きを定めることで示した。モンタギューの意味論は一つの研究プログラムとしての自然言語の形式意味論へと発展し、その登場からおおよそ 50 年たったいま、形式意味論は言語学の一分野として確固たる地位を築いている。

さて、言語についての経験科学としての言語学は、チョムスキー以降、主に、言語を生み出し理解するヒトの言語能力に関する心理学・認知科学・脳神経科学的研究として発展してきた。形式意味論は、こうした言語についての心理学的探求とは一線を画す仕方で発展してきたように見える。他方で、心理学分野では形式意味論で得られた知見の積極的な利用も見られる。こうした状況において、形式意味論と心理学的な言語理論の関係をどのように考えればよいのだろうか。例えば、モデル論的意味論が表現に与える意味と、ヒトの頭の中で行われるその表現の意味の計算はどのように関係するのだろうか。

こうした問題意識のもと、本ワークショップでは、形式意味論を言語についての心理学的探究の一つとして位置付けることを試みる。

ワークショップは次のように進める。まず藤川が、全体の導入と、初期の自然言語形式意味論（と言語哲学）における反心理主義について簡単に紹介する。次に和泉が、近年注目を集める実験言語哲学について論じる。まず、実験哲学者 Machery et al. (2004) が巻き起こした固有名の理論に関する論争を概観し、社会心理学的手法がどのように言語哲学的議論の中で使用されてきたのか考察する。さらに、言語学分野における実験的意味論・語用論研究の事例を導入することによって、心理学的手法が実際の理論構築に寄与する可能性を検討する。次に、藤川が、一般量子子理論とそれに基づく意味論的な普遍的特性(semantic universal)の仮説と、意味論的な普遍的特性が量化表現や決定詞の学習にどう関わるのかに関する最近の心理学・認知科学の研究を紹介し、それらにおける意味概念の整理を行う。最後に、橋本が、自閉症スペクトラム

障害の認知の特殊性について、その言語機能や学習可能性に触れながら、主に脳神経科学の観点から論じる。またそこでの研究成果が意味論にどのような含意をもちうるかについても考察する。ワークショップ全体を通じて、形式意味論にとって心理学的なデータ・知見が有用だ(逆もまた然り)ということをうまく捉えることができるメタ意味論的なフレームワークを提示することを目指す。